



世界ミステリ全集

7



ディミトリオスの棺
反 乱
インターコム of 陰謀
エリック・アンブラー



早川書房

世界ミステリ全集 7

エリック・アンブラー

「ディミトリオスの棺」 菊池 光訳

「反乱」 宇野輝雄訳

「インターコム」の陰謀」 村上博基訳

廃止>

1972年 3月20日初版印刷 1972年 3月31日初版発行

発行者 早川 清 東京都千代田区神田多町2〜2

発行所 株式会社早川書房 東京都千代田区神田多町2〜2

電話 東京 (254) 1551〜8 振替 東京47799

印刷所・株式会社享有堂印刷所 製本所・株式会社明光社

本文用紙・本州製紙株式会社

表紙クロス・本州リンソン／英国ワトソン社製

函紙・駿河製紙株式会社

製函所・株式会社佐藤製函所

定価1300円

<乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えます> 0397-807070-6942

目次

デイミトリオスの棺……………3

反乱……………223

インターコム of 陰謀……………409

エリック・アンブラーについてへ座談会……………589

エリック・アンブラー著作リスト……………605

函・扉・表紙／勝呂 忠

デ
イ
ミ
ト
リ
オ
ス
の
棺

エ
リ
ツ
ク
・
ア
ン
ブ
ラ
ー
菊池 光 訳

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1972 Hayakawa Shobo

THE MASK OF DIMITRIOS

by

ERIC AMBLER

Copyright © 1939 by

ERIC AMBLER

Translated by

MITSU KIKUCHI

Published 1972 in Japan by

HAYAKAWA SHOBO & CO., LTD.

This book is published in Japan by arrangement
with PETER JANSON-SMITH LTD., through
CHARLES E. TUTTLE CO., INC., TOKYO.

アラン、フェリス・ハーヴェイ夫妻に捧ぐ

「しかし、忘却は無法にも、盲目的にけし
の花をまぎちらし、永続に値する価値の有
無を無視して、人々への記憶を処理してゆ
く……永遠の記憶に選ばれる恵みなくして
は、最初の人間も最後の人間も、一様に不
明の存在と化し、メトセラの長命も、個人
の年代記に終わったにちがいない」

『壺葬論』トマス・ブラウン卿

デ
イ
ミ
ト
リ
オ
ス
の
棺

登場人物

チャールズ・ラティマー……………イギリスの経済学者であり、探偵小説作家

ハキ大佐……………イスタンブールの秘密警察長官

ディミトリオス・マクロボウロス……………ギリシア生まれの国際的犯罪者

ショレム……………ユダヤ人の金貸し

ドリス・モハメッド……………黒人の人夫

フェドール・ムイシュキン……………ロシア人、スミルナの通訳

フレデリック・ピーターズ……………旧麻薬団の一員

N・マルカリス……………ソフィアのフランス通信社記者

マダム・ラ・プレヴェサ……………ディミトリオスの昔の情婦

ラティスロー・グロテック……………ポーランド人、もとスパイ

1 妄執の始まり

かつて、シャンフォーバというフランス人が、才人のほまれ高い男であつたにもかかわらず、偶然は神意の別名である、と言つたことがある。

これは、いわば、都合のいい循環論法的な警句というべきものであつて、その狙いは、偶然が人生の出来事に、支配的とまではいかなくても、かなり重要な役割を演じることがあるという、あまり愉快でない真実を、信じさせまい、とすることにある。かといつて、それをいちがいに否定してしまふこともできないのである。現実には、偶然が、控えめな神の意志と受け取られても仕方がないような、さして整然としてはいないにしても、ある程度の一貫性をそなえた作用をすることが、時にはある。

ディミトリオス・マクロポウロスの話は、その一つの例である。

ラティマーのような男が、ディミトリオスのような人間の存在を知つたという事実だけでも、奇怪至極である。ましてや、彼が現実にディミトリオスの死体を見、その男の謎に包まれた一生を調べるために、ひまもないのに数週間を費やし、あげくのはてに、一人の悪党の室内装飾に対する奇妙な趣味のおかげで危く一命を拾うような破目にいつの間にかはまりこんでいつたことは、とうてい信じ難い奇怪さといわざるをえない。

しかもなお、これらの事実を、事件の他の事実と並べてみると、迷信的な畏怖の念にうたれないではいられない。実際の出来事があまりにもとつびなので、「偶然」とか「暗合」といつた言葉を使う気になれないような気持ちにすらなる。しかもなお懷疑的な人間には、一つだけ慰めがある——かりに人間の思考を超越した力といえるものがあったとしても、その力は、人間以下の非能率さで行使されている、という点である。よほどの愚か者でないかぎり、ラティマーを手先に選ぶようなことはしなかつたはずである。

成人後の最初の十五年間に、チャールズ・ラティマーは、イギリスの二流大学の経済学の講師になつた。三十五歳になつた頃には、講義のかたわら、三冊の本を書いていた。

一冊目は、十九世紀イタリヤの政治思想に対するブルード
ーンの影響に関する研究であった。二冊目は、「一八七五
年のゴータ綱領」と題されていた。三冊目は、ローゼンベ
ルクの「二十世紀の神話」の包含する経済学的意義の評価
であった。

彼が最初の探偵小説を書いたのは、三冊目の著作のほう
大な校正刷に手を入れ終わった直後のことで、国家社会主
義的思想およびその予言者ローゼンベルク博士との一時的
な交わりの後に残った暗いゆううつ感を払いのけたかった
からである。

「血ぬれたシャベル」は、一躍、大成功をおさめた。続いて、
「蠅の告白」と「殺人兵器」が出た。まもなくラティ
マーは、余暇に探偵小説を書いている数多い大学教授の中
で、余技で金を儲けて恥ずかしそうな顔をしているごく少
数の一人になった。早晚、彼が名実ともに職業作家になる
ことは、避け難い運命であったのであろう。三つの事情が
彼の転身を早めた。第一は、信念の上から彼が固執した事
柄で、大学当局と意見が一致しなかったことである。第二
は、病氣であった。第三は、たまたま彼が独身であった、
という事実である。「この戸をとさず釘はない」が出版さ
れて間もなく、生来の健康体を根底から揺るがすような病

を患ったが、回復すると、さしてためらいを感じることも
なく辞表を提出し、陽光の下で五冊目の探偵小説を書き上
げるべく、国を離れた。

彼がトルコへ行ったのは、六冊目を書き終えた翌週であ
った。すでにアテネの街とその周辺で一年すごしており、
どこか違った土地へ移りたい、と考えていた。健康状態は
たいへん良くなっていたが、秋のイギリスへ帰るのはなん
としても気が進まなかった。ギリシア人の友人のすすめに
従って、ピレウスから汽船でイスタンブールに向かった。

彼が、ハキ大佐から初めてデイトリオスのことを聞いた
のは、そのイスタンブールにいる時であった。

紹介状というのは、あまりたよりにならない代物である。
とかく、所持者が紹介者と通り一遍の面識しかなく、その
紹介者と先方はそれ以下の知り合いである場合が少なから
ずある。紹介状を提示することによって、三者共に満足で
きる結果になる可能性はきわめて少ない。ラティマーがイ
スタンブールへもって行った中に、マダム・シャヴェなる
女性あての紹介状があった。彼女はボスボラス海峡に面し
た別荘に住んでいる、ということであった。到着後、三日
目に彼女に手紙を出すと、別荘で四日間にあたり催され
るパーティへの招待状が届いた。あまり気が進まなかった

が、受諾した。マダム・シャヴェにとって、プエノス・アイレスからの復路は、往路と同様に、文字どおり惜しみなく黄金で舗装されていた。非常に容姿端麗なトルコ女性である彼女は、アルゼンチンの富裕な食肉仲買商とうまく結婚、離婚し、その取引きによる利得のごく一部をさいて、かつてトルコ王家の一族が住んでいた小宮殿を買取った。

宮殿は、辺鄙で交通不便な場所ではあるが、この世のものとは思えないような美しい湾を見下ろしてたっており、水の供給が、九つある浴室の一つすら充分にまかなうに足りない点を除けば、あらゆる設備が非のうちどころもないほどに整っていた。ほかに客がいなくて、氣にいらぬことがあると（それがしばしばあった）召使いの顔を激しく殴打するという、女主人のトルコ風の習慣さえなければ、寛ぐにはあまりにも豪華なそのような環境を初めて経験するラティマーは、滞在を心から楽しむことができたにちがいない。

ほかの滞在客というのは、マルセイユからきているたいへん騒々しい夫婦、イタリア人が三人、若いトルコ海軍士官二人と彼らの目下の「許婚者」たち、夫人同伴のイスタンブールの実業家連中、などであった。客たちは、マダム・シャヴェの無尽蔵とも思えるオランダ・ジンを飲んだり、

一人の召使いが蓄音器につききりで、客が踊っていようとまいとおかまいたしにかけ続けるレコードに合わせて踊るなどして、時間の大部分を過ごしていた。健康不充分を口実に、ラティマーは、酒はほどほどにし、踊りはほとんど断わっていた。たいがいの場合、彼は無視された格好になつてた。

滞在の最後の日の午後おそく、彼が、レコードの音を避けて、蔓棚におおわれたテラスの端の椅子に坐っていると、運転手つきの幌がけの大型車が、別荘へのほこりっぽい長い道をうねりながら登ってくるのが見えた。車があたりに騒音を響かせて眼下の中庭に入ってくると、後ろの座席にいた男が、勢いよくドアをあけて、車が停まるか停まらないうちにとびおりた。

背の高い男で、ほっそりした頬がひきしまっており、わずかに日焼けした肌の色が、プロシア軍人風に短く刈りこんだ白髪と好対照をなしていた。狭いひたい、くちばしのように長い鼻、薄い唇が、なにか食肉鳥のような感じを与える。五十以下ということはあるまい、とラティマーは考え、コルセットをつけているかどうかと、見事な仕立ての将校服の腰のあたりを慎重に見廻した。

彼は、その長身の将校が、袖から絹のハンカチをサッと

取り出して、ピカピカに磨き上げられたエナメル革の乗馬靴の目に見えないほこりを払い、帽子を粹に斜めにかぶり直して、大股で視界から消えて行くのを眺めていた。別荘のどこかでベルが鳴った。

ハキ大佐というその将校は、たちまちのうちにパーティーの人気者になった。彼が着いて十五分ほどたった頃、マダム・シャヴェが、大佐の思いがけない来訪で自分としてはたいへん困惑していることを、招待客にはっきりと知ってもらいたがっているような、恥じらいをおびた混乱の表情で、テラスに彼を案内し、みなに紹介した。大佐は、笑みをたたえたいんぎんな態度で、男たちにはカチッと踵を合わせ、婦人連中には頭をさげて手に唇をつけ、海軍士官たちの敬礼に答礼し、実業家の夫人たちに秋波を送った。ラティマーは、その演技のあまりの見事さに心を奪われていたので、自分が紹介される番になって名前を呼ばれると、ハッと慌てた。大佐が、握手した手を、心をこめて何度も振った。

「あなたに会えて、ほんとうに嬉しい」大佐が言った。

「大佐殿は、英語がたいへんお上手なの」マダム・シャヴェがフランス語で説明した。

「かたことですよ」ハキ大佐がフランス語で言った。

ラティマーが、にこやかに相手の薄灰色の目を見つめた。
「ごきげん、いかがですか？」

「ま、大いに元気、というところです」大佐が大まじめないんぎんさで答え、次に移って、水着姿の太った娘の手に唇をつけ、品定めするように見廻していた。

ラティマーが再び大佐と言葉を交したのは、その夜、かなりおそくなつてからであった。大佐は、冗談をとぼし、声高く笑い、人妻にはおどけた厚かましきで言い寄り、未婚女性にはもっと控えめな秋波を送るなど、陽気な振舞いでパーティーに活気を注入した。時折ラティマーと目が合うと、情けなさそうな苦笑をうかべた。「自分は、このように道化た真似をしなければならないのだ——みんながそれを期待しているのだよ」と笑みが告げる。「それを、好きでやっていると思われては困る」夕食が終わってかなり時間がたち、客たちがしだいにダンスに飽きて、男女混成のストリップ・ボーカーに関心を引かれ始めた頃、大佐がラティマーの腕をとって、テラスへ連れ出した。

「失礼をお許し願いたい、ミスタ・ラティマー」大佐がフランス語で言った。「ぜひ、きみと話がしたかったのだ。あの女連中ときたら——まったく、くたびれる」煙草入れをラティマーの鼻先に差し出した。「煙草は？」

「ありがとう」

ハキ大佐が、肩越しに後ろを見た。「あっちの端の方が、もっと静かだ」と言い、二人で歩き始めると、「実は、私がきょうここへきたのは、特にきみに会いたかったからなのだ。マダムから、きみがきておられると聞いて、自分がたいへん敬服している本の著者に、なんとしてもお会いしたかったのだ」

ラティマーは、相手の賛辞に、当たりさわりのない感謝の言葉を呟いた。彼は困惑した。大佐が、経済学と探偵術のいずれを考えているのか、知る途がなかったからである。以前に、彼の〈この前の本〉は面白かった、と言ってくれた人の好い老学監に、殺人は射殺と撲殺のどちらを好むか、ときいて、相手の老人を仰天させ、気を悪くさせたことがある。といって、どの本のお話か、ときくのは、いかにも気取りを感じさせる。

しかし、ハキ大佐は、そのような質問をする余裕を与えなかった。「私は、最新の探偵小説を全部、パリから送らせている」彼が続けた。「探偵小説以外は読まないのだ。私のコレクションをお目にかけたいくらいだ。とくに、イギリスとアメリカの作品が好きだ。両国の優秀作品は、一つ残らずフランス語に翻訳されている。フランスの作家そ

のものには、私はあまり好感は抱いていない。フランス文化は、第一級の探偵小説を生み出す種類のものではない。つい最近、きみのへ血ぬれたシャベルを蔵書に加えたばかりだ。恐るべき作品だ！ただ、私には、標題の意味がよく理解できないのだ」

ラティマーは、かなりの時間をかけ、苦勞しながら、「鉞を鉞（くわ）というは正直者」という表現にひっかけて、題名そのものに「鉞をシャベルと呼ぶ」の意を含め、真犯人に關する重要な手がかりを（一応の理解力ある読者に）与えているその言葉のあやを、フランス語で説明しようと努めた。

ハキ大佐は、熱心に聞き入り、ラティマーが充分に要点を説明し終わらないうちに、うなずきながら、「なるほど、なるほど、それでよくわかった」と言った。

「ムシュー」ラティマーががっかりして説明を諦めると、大佐が言った、「どうだろう、今週中に一度、私といっしょに昼食していただけないであろうか。実は」謎めいた言葉を付け加えた、「きみのお役にたつことができるかもしれないのだ」

ラティマーは、どのような面でもハキ大佐が自分の役にたちうるのか見当がつかなかったが、喜んで昼食を共にする、

と答えた。二人は、三日後に、ペラ・パレス・ホテルで落ち合うことにした。

ラティマーがようやくその昼食の約束について、真剣に考え始めたのは、その前日の夕方になってからであった。

彼は、自分のホテルの談話室で、取引銀行のイスタンブール支店長と話していた。

コリンソンは感じのいい男だが、話相手としては退屈だな、とラティマーは思った。彼の話は、そのほとんどすべてが、イスタンブール在住のイギリス人とアメリカ人社会の出来事の噂話であった。「フィッツウィリアム夫妻を知っていますか？」彼が話し出す。「ご存じない？ 残念ですな、きっとあなたも氣にいらはすだが。そう、ついこの間のことでしたが……」ケマル・アタチュルクの経済改革に関する情報源としては、彼は全く役にたたなかった。「ところで」アメリカ人自動車セイルスマンのトルコ生まれの妻の行状について一席拝聴した後、ラティマーが言った、「ハキ大佐という男のことを、なにか知りませんか？」

「ハキ？ なぜ彼のことを思いついたのですか？」

「明日、いっしょに昼食することになっているのです」

コリンソンが眉を上げた。「これは驚いた、ほんとです

か？」あごを掻いていた。「そう、彼の噂は聞いてますよ」ためらっていた。「ハキは、この土地で、よく名前は聞くが、絶対に正体のつかめない人間の一人ですよ。つまり、黒幕的存在なんですな。アンカラの政府の最上層部にある、と一般に思われている連中より、はるかに強い影響力をもっている男です。ケマル・パシャの直系で、一九一九年に、特別任務をおびてアナトリアにいた連中の一人で、臨時政府の代議員でした。その当時の彼の噂を聞いています。血に飢えた悪魔、ということでした、誰の話を聞いても。囚人の拷問の仕方がひどかった、ということなんですよ。しかし、当時は双方の側でやっていたことだし、私にいわせれば、始めたのは皇帝の側ですよ。また、噂によると、彼は、一度にスコッチを二本あけて、完全なしらふでいるそうです。その方は、あまり信用できませんがね。どういうきっかけで、彼と知り合ったのですか？」

ラティマーが説明した。「どういう仕事をしているんだろう？」彼が付け加えた。「あの制服がどうも理解できないな」

コリンソンが眉をすぼめた。「たしかな筋から聞いたところでは、秘密警察の長官、ということですが、これも、たんなる憶測かもしれない。この土地でいちばん困るのは、